政 策 企 画 書

『高齢者の 活き活き × イケイケ 社会に向けて』

～つくる・かせぐ・つながるで“活きがい”を～

チーム　**(シニア) ワセ**

安全環境部	循環社会推進課	藤崎　晶代
健康福祉部	県立病院	山﨑　千尋
観光営業部	ふるさと営業課	野川　洋平
土木部	丹南土木事務所	平井　勝治
福井市	環境課	中津　浩平

目次

要約 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第１章　現状分析
　第１　人口推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　　1）高齢化の進行
　　2）生産人口
　第２　社会保障費の増加 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　　1）年金、定年
　　2）医療費、介護費、病床数
　第３　高齢者の現状 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　　1）収入、就労
　　2）社会的つながり
第２章　課題分析
　第１　課題の明確化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １０
　　1）ＳＷＯＴ分析
　　2）課題および戦略の方向性
　第２　高齢者の意識調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １２
　第３　各種団体への聞き取り調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １５
　　1）伝統農業や伝統産業について
　　2）地域における高齢者等の就労の場としての販売施設等について
　　3）高齢者の人的なつながりを支援する取組について
第３章　政策提言
　第１　政策の基本的な考え方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２２
　第２　政策の効果と目標値 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２２
　第３　重点施策 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２４
　　1）健康増進施策
　　2）収入増額施策
　　3）であい創出施策

おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０

要約

現状と課題

高齢化の進行

①65歳以上人口の割合増加
②高齢単身世帯数が増加
③生産人口の減少

社会保障の限界

①社会保障費の増加
②介護サービス利用者増加
③病床数の不足

高齢者の現状

①年金保険料率の引き上げ
②社会的に孤立する高齢者の増加

戦略の方向性

『農業や工芸の新たな担い手として高齢者を活用し、農業や産業の継承を行うことで、生活に活きがいを創出する』

『高齢者が主体となった就業の場を提供し、少しでも賃金を得ることで活きがいを創出する』

『社会的な孤立を防ぐため、高齢者の人的・地域的つながりを強化することで活きがいを創出する』

政策提言

マルシェ“あつま・ロッサ”の開設

つくる活きがい（元気生活率の向上）

1）健康増進施策

農業や伝統工芸の生産を通して、健康な身体づくりを目指す

かせぐ活きがい（65歳以上の有業率向上）

2）収入増額施策

レストランを開設し、スタッフ等に高齢者を活用し、高齢者の新しい収入源のひとつとする

つながる活きがい（社会的孤立の軽減）

3）であい創出施策

高齢世代に特化した交流の機会を促進させる

目標

健康寿命日本一へ

3年後には健康寿命が男性79歳を80歳、女性83歳を85歳に

はじめに

福井県の平均寿命は平成 23 年時点で男性 80.4 歳、女性 86.9 歳であり、定年を迎える 60 歳時点ではまだ 20 年以上も長生きする時代となっており、今後さらに平均寿命が延びていくと推計されています。

全国平均よりも 3 年程度高齢化が進行している福井県において、これからの超高齢時代を見据え、高齢者の『活きがい』づくりや生涯現役で活躍し続けられるような社会環境を整えていく必要があります。

65 歳を迎えた団塊の世代が労働者市場から本格的な引退過程に入るため、これらの人が活躍するための環境づくりが課題となっています。

一方、高齢化による社会保障負担の増加も懸念されていますが、高齢者が『活きがい』を持って社会参加することで、健康維持、介護予防となることが期待され、社会保障負担の軽減につながると考えられます。

本企画書では、超高齢社会において高齢者が明るくなれば日本とりわけ福井が元気になると考え、本県の健康寿命を延ばすことを目的として、高齢者が活き活きとなる社会、イケイケになる社会を実現するための施策について提案します。

健康寿命：平均寿命から、日常生活を大きく損ねる病気やけがの期間を差し引いたもの 福井県の現状…男性 79 歳・女性 83 歳（H23）

第１章　現状分析

第１　人口推移

１）高齢化の進行

①人口推移

平成25年6月1日現在、本県の総人口は795,437人で、男性384,932人、女性410,505人となっている。平成11年の831,222人をピークに毎年0.3～0.5%程度減少しており、平成24年8月には80万人を下回った。なお、全国的にも毎年人口が減少している傾向は同じである。

将来の推計人口を見ると、毎年0.5～1.0パーセントの割合で減少し、平成42年（2030年）には本県の総人口は約70万人になると予想される。（図1-1）

なお、65歳以上の高齢者数は平成37年～平成42年（2025～2030年）頃に約24万人となりピークを迎えるが、生産年齢人口や年少人口の減少が続くことにより、高齢者の総人口に占める割合は増加となることが予想される。

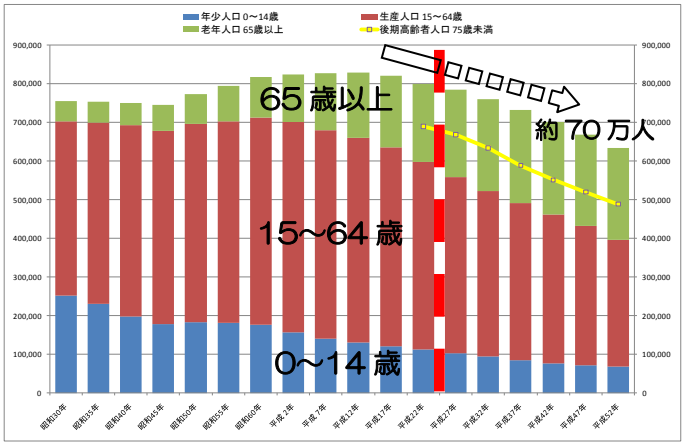


図1-1　福井県の人口の推移　（平成22年度までは総務省「国勢調査」、平成27年以降は国立社会保障・人口問題研究所「都道府県の将来推計人口」

②世帯類型の推移

平成42年（2030年）の、50代から70代の単身世帯の割合は、約25%にのぼり、単身世帯の主な理由は、未婚3割、離婚2割、死別2割になっている（図1-2）。

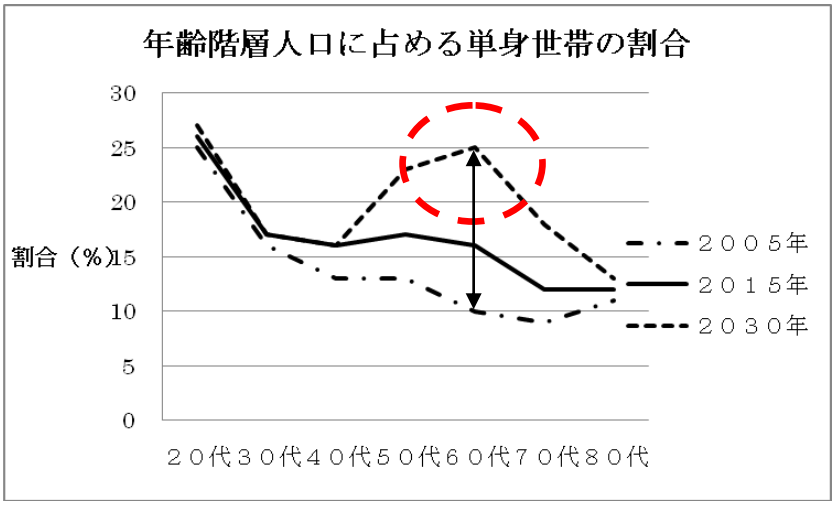


図 1-2　年齢階層ごとの単身世帯の割合

２）生産人口

①生産人口の減少

本県の年少人口は平成22年（2010年）の11.2万人から平成42年（2030年）には7.7万人と、毎年2千人程度減少しており、総人口に占める割合も減少していくと予想される。

また、生産人口についても同様に平成22年の49.1万人が平成42年には38.4万人と減少することが予想されている。（図1-3）

人口構成割合を見てみると、年少人口［15歳未満人口］が13.8%、生産年齢人口［15～64歳人口］が59.8%、老年人口［65歳以上人口］の割合が26.5%、その内後期高齢者［75歳以上］は14.4パーセントとなっており、現在は約4人に1人が65歳以上の高齢者となっている状況である。

老年人口割合の将来推計を見てみると、平成22年の25.2%だったが平成42年には34.2%となり、今後も割合が高くなると予想され、3人に1人が高齢者となる。

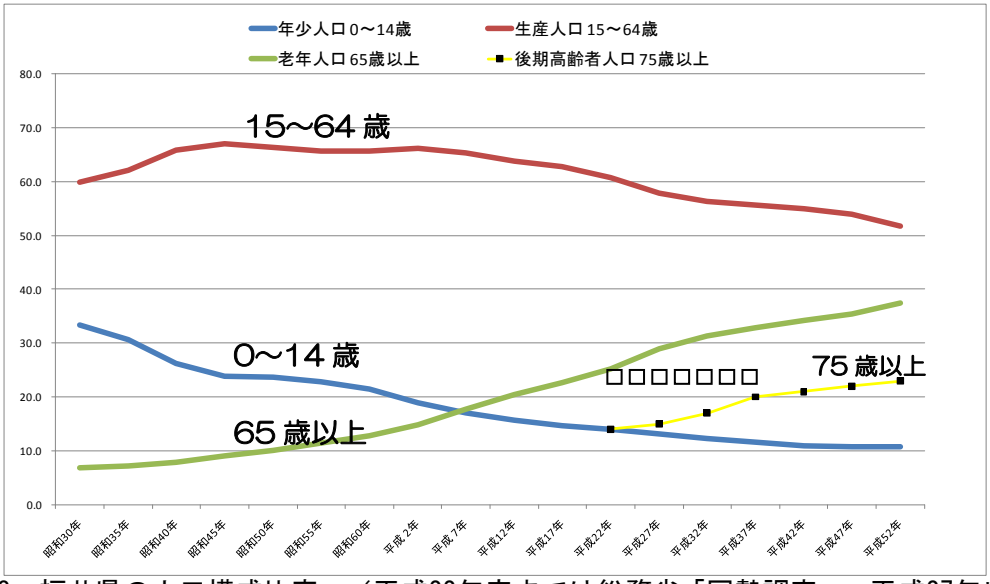
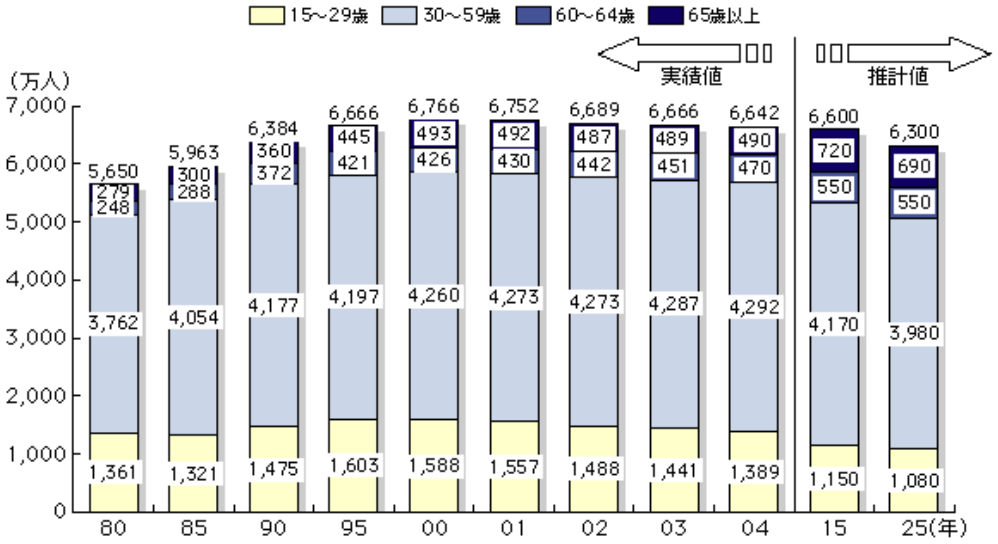


図1-3　福井県の人口構成比率　（平成22年度までは総務省「国勢調査」、平成27年以降は国立社会保障・人口問題研究所「都道府県の将来推計人口」）

②労働力の推移

総人口の減少が始まったのは平成 17 年（2005 年）からであるが、人口減少状況を年齢別に見ると、15 歳から 64 歳までのいわゆる生産年齢人口は、既に平成 8 年（1996 年）から減少に転じている。総人口の減少もさることながら、高齢化率の上昇を反映し、全人口に占める生産年齢人口の比率が低下していく少子高齢化社会である。雇用政策研究会の報告によると、女性や高齢者等の労働市場への参入が進まず、性・年齢別の労働力率が 2004 年の実績と同じ水準で推移した場合、全体の労働力率は平成 16 年（2004 年）（60.4%）と比較して、2015 年においては 3.7%の低下、平成 42 年（2030 年）において

は6.8%低下すると見込まれる。また、厚生労働省「職業安定局推計」によると、労働力人口は平成16年（6,642万人）と比較して、平成27年（2015年）においては約42万人減少、平成37年（2025年）においては約342万人減少することが見込まれる。労働力人口の減少に伴い、就業者数も減少の一途をたどることとなる。（図1-4）



資料：2004年までは総務省「労働力調査」、2005年以降は厚生労働省「職業安定局推計」（2002年7月）
（注）労働力人口とは、15歳以上人口のうち就業者と完全失業者をあわせたものを指す。

図1-4　労働者数の将来推移

＜まとめ＞

生産人口が減少していくことは生産力の減少を意味しており、今後も増加される老年人口が生産人口となり、経済を支えていくことが重要だと考えられる。

第２　社会保障費の増加

１）年金、定年

平成27年10月からは共済年金は厚生年金に統一化され、保険料率も平成30年度の18.3%で統一されるまで、引き上げられていく。

平成25年4月より高年齢者雇用安定法の改正が行われ、希望者全員を65歳まで継続雇用する制度の導入が企業に義務付けられ、さらに、平成27年（2025年）には65歳までの雇用が義務付けられる見込みである。

２）医療費、介護費、病床数

本県の１人当たりの後期高齢者医療費は、平成 23 年で年平均額 891,328 円であり、内訳としては、入院に係る医療費が全国平均よりも高くなっている。（図 1-5）

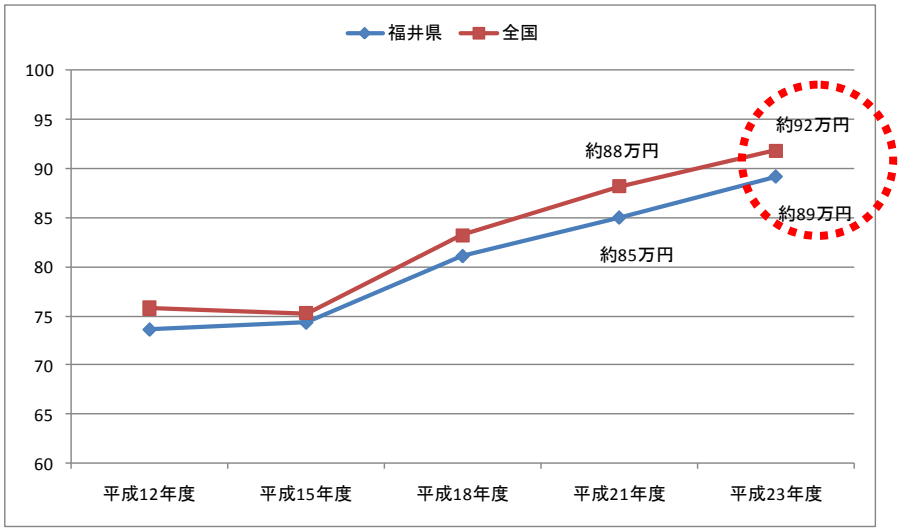


図 1-5　１人当たりの医療費の推移（福井県、全国）

介護サービス利用者の増加に伴い。本県の介護給付費は平成 12 年度の 29,699 百万円から 23 年度は 56,062 百万円と、ほぼ倍増しており、中でも在宅サービスの伸びが大きく約４倍となっており、今後の老年人口率が高くなることで介護費用がさらに増加していくことが予想される。（図 1-6）

		平成 12 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度（見込）	伸び率（H23/20）
福井県	在宅サービス（施設・在宅割合）	7,609 25.6%	23,830 50.6%	26,576 52.6%	29,026 54.4%	31,615 55.4%	32.7%
	施設サービス（施設・在宅割合）	22,090 74.4%	23,303 49.4%	23,956 47.4%	24,321 45.6%	24,447 44.6%	4.9%
	合　　計	29,699	47,133	50,532	53,347	56,062	18.9%
全国	在宅サービス（施設・在宅割合）	1,095,571 33.9%	3,531,002 58.1%	3,860,275 59.4%			
	施設サービス（施設・在宅割合）	2,133,567 66.1%	2,543,114 41.9%	2,637,259 40.6%			
	合　　計	3,229,138	6,074,116	6,497,534			

※施設：特別養護老人ホーム（地域密着型を除く）、介護老人保健施設、介護療養型医療施設
集計には、特定入所者介護サービス費、高額介護サービス費および審査支払手数料を含まない。

図 1-6　介護給付費の推移（福井県、全国）

福井県内の現在の病床数は 11,889 床であるが、平成 42 年（2030 年）に高齢者数がピークとなる。しかしながら、病院の病床数は減少傾向が続いており、今後、病床数が増加される見込みはない。（図 1-7）

厚生労働省は、今後は、地域の実情に応じた医療・介護サービスとして、居住系の施設やサービス付高齢者住宅等を増やしていくことや、在宅での介護サービスを充実させていく方針であるものの、実際に老老世帯や高齢者単身世帯が増えると介護難民が増加することが予測されている。病院や施設と言ったハード対策では十分に保障できず、多くの高齢者が自費で民間施設を利用していかなくてはならない状況が予測されている。

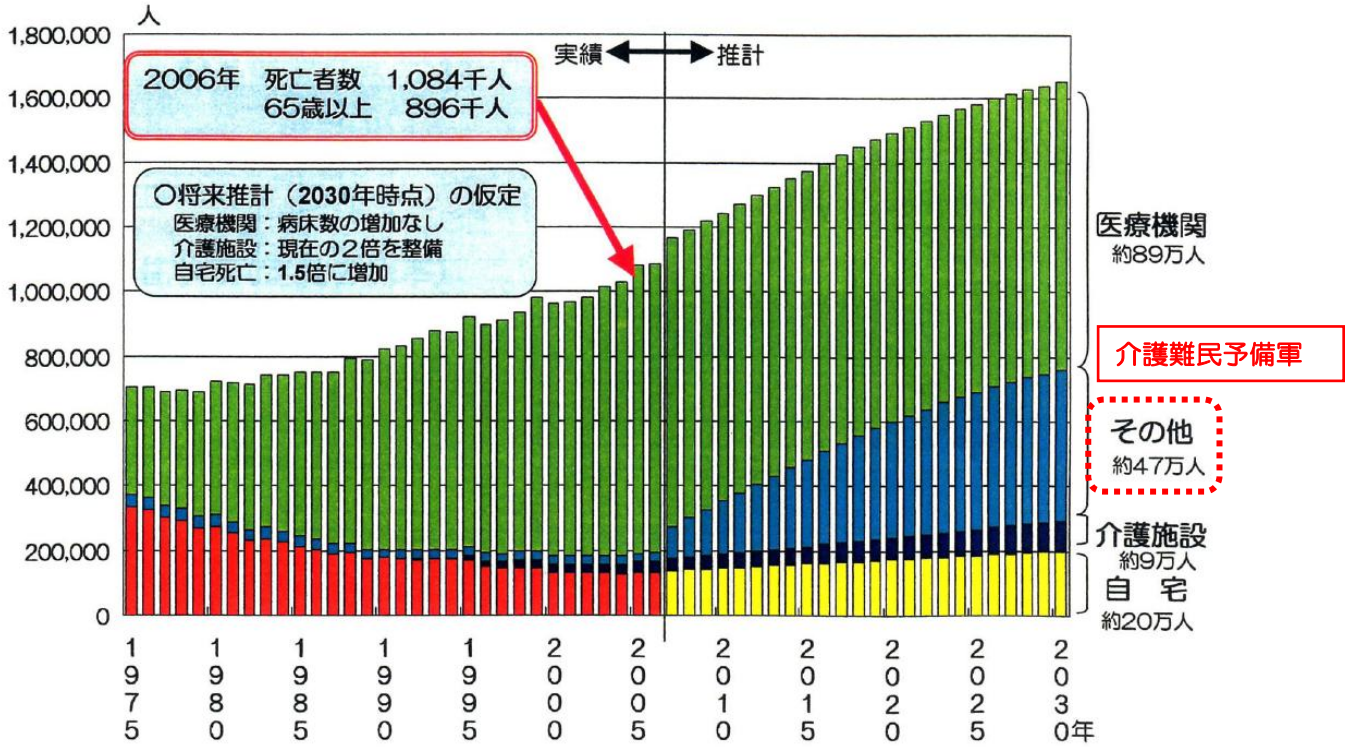


図 1-7　今後の看取りの場所

＜まとめ＞

団塊世代が高齢期を迎え高齢化が一層進展する中で、できる限り元気な状態を維持していくことが、今後の高齢化社会の中での医療保障の面においても非常に重要である。

第３　高齢者の現状

１）収入、就労

高齢者世帯の平均年間所得は307.9万円で、全世帯平均（549.6万円）の半分強。（図1-8）

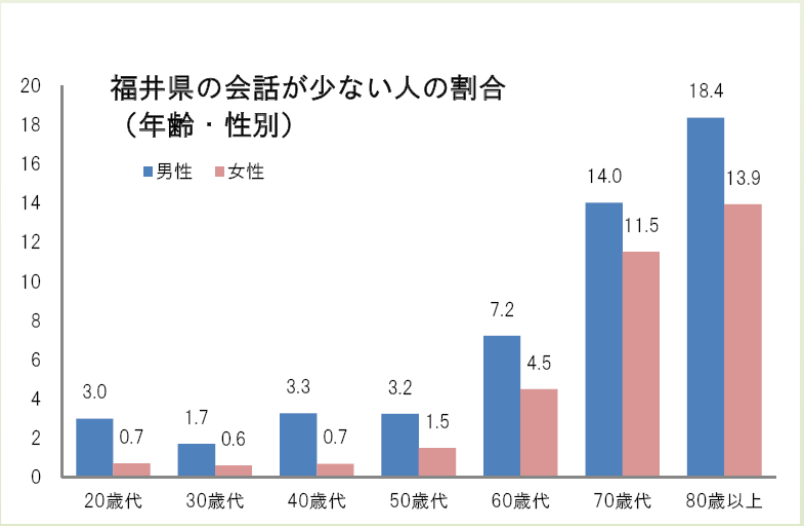
世帯人員一人当たりでは、高齢者世帯の平均世帯人員が少ないことから、197.9万円となり、全世帯平均（207.3万円）との間に大きな差はみられない。

区分	平均所得金額			
	一世帯当たり			世帯人員一人当たり（平均世帯人員）
高齢者世帯	総所得	307.9万円		197.9万円（1.56人）
	稼働所得	53.2万円	（17.3%）	
	公的年金・恩給	216.2万円	（70.2%）	
	財産所得	18.2万円	（5.9%）	
	年金以外の社会保障給付金	2.5万円	（0.8%）	
	仕送り・その他の所得	17.7万円	（5.7%）	
全世帯	総所得	549.6万円		207.3万円（2.65人）
出典：厚生労働省「国民生活基礎調査」（平成22年）（同調査における平成21年1年間の所得）				
（注）高齢者世帯とは、65歳以上の者のみで構成するか、又はこれに18歳未満の未婚の者が加わった世帯をいう。				

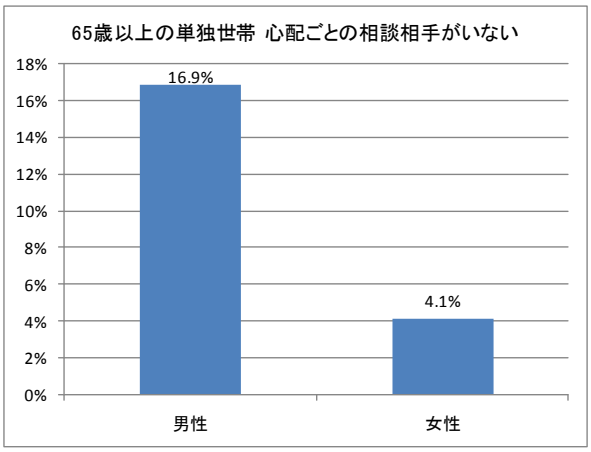
図1-8　高齢者世帯の所得

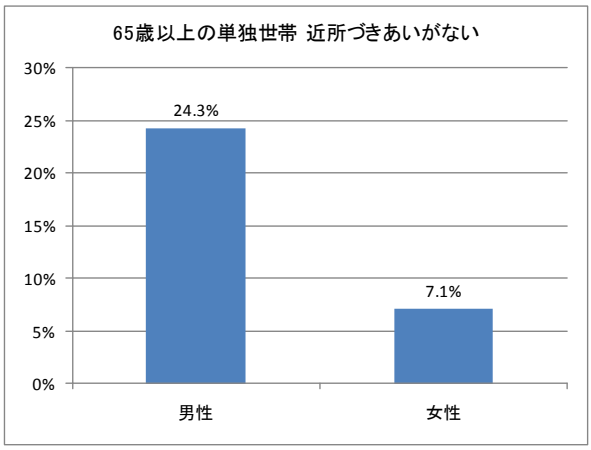
２）社会的つながり

会話が極端に少ない人の割合は年齢とともに急増し、特に 70 歳代、80 歳以上で非常に高い割合となっている。また、近所づきあいがなく、心配事を相談できる相手もいない割合が高くなっている。



出典：東京大学「福井の希望と社会生活調査」





出典：内閣府「世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査」

図 1-9　高齢者の社会的つながり

＜まとめ＞

社会的つながりが希薄化する中で、身の置き場・拠り所をつくり、社会的孤立を軽減する。

第２章　課題分析

第１　課題の明確化

１）ＳＷＯＴ分析

課題を整理し、その解決に向けて何が必要なのかを明確にするため、ＳＷＯＴ分析を行った。

強み（県内）【Strength】	弱み（県内）【Weakness】
①　優れた伝統産業 ②　長寿 ③　高い高齢者の就業率（全国７位） ④　高いボランティア活動率（全国９位）	①　産業の衰退 ②　農林漁業の衰退 ③　郊外化（商店街の衰退） ④　車社会（公共交通機関が不十分）
機会（外部環境）【Opportunity】	脅威（外部環境）【Threat】
①　定年の延長（生涯現役の啓発） ②　新産業の創出（第６次産業） ③　医療、介護市場の拡大 ④　再生医療の進展	①　社会保障費の増加 ②　所得の格差拡大（就労の場が少ない） ③　単独世帯の増加 ④　急速な高齢化

以上のＳＷＯＴ分析から、３つの戦略の方向性が見えてくる。

２）　課題および戦略の方向性

（１）「強み」で「機会」を活かし、「弱み」を克服していく戦略

本県には優れた伝統産業があり、品質も非常に高い技術を有している「強み」がある。また、近年は新たな「機会」（第６次産業）が創出されている一方、農業や伝統産業が衰退していくという「弱み」もある。

これを組み合わせると、**『農業や工芸の新たな担い手として高齢者を活用し、農業や産業の継承を行うことで、生活に活きがいを創出する』という方向性**が考えられる。

（２）「強み」を活かし「脅威」を克服する戦略

本県は高齢者の就業率も高く、元気で働く意欲が高い高齢者が多いという「強み」がある。一方、社会保障費の増加に加え、所得の格差が拡大しているといったことは、本県の高齢者にとって大きな「脅威」となっている

これを組み合わせると、**『高齢者が主体となった就業の場を提供し、少しでも賃金を得ることで活きがいを創出する』という方向性**が考えられる。

（３）「弱み」と「脅威」で最悪の事態を招かない戦略

本県は、一世帯当たりの自家用車保有率全国１位も起因となり、郊外化が進むことによって、商店街や地域の衰退が生じているという「弱み」がある一方で、単独世帯数の増加といったことも「脅威」となっている。

これを組み合わせると、**『社会的な孤立を防ぐため、高齢者の人的・地域的つながりを強化することで活きがいを創出する』という方向性**が考えられる。

第２　高齢者の意識調査

高齢者の就業状況や就業に関する意識を把握するため、県内の施設等においてアンケート調査を行った。

・65～74 歳で働いている高齢者は約 3 割であり、働く理由としては「健康・生きがいのため」が多い。

・現在働いていない高齢者は、その理由として「優先事項や体力的な問題」を挙げる割合が高く、働く意欲のある高齢者の割合は少ない。

・働いていない高齢者は、日中の時間の多くを可能な範囲で「趣味」や「農作業」などに費やし活動している。

・働く意欲のある高齢者の半数以上は、「経験を生かした仕事」や「条件に合う仕事」に携わりたいという回答であった。

・高齢者が、働くために必要とする支援として「仕事の斡旋、紹介」や「個々の都合に合わせたサポート」が約 5 割を占めた。

［日時］　8 月 20 日～21 日、23 日、25 日

［場所］　ふくい健康の森　生きがいセンターおよびスポーツセンター、
　　集落の寄り合い（坂井市、勝山市）

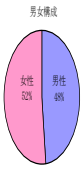
［方法］　高齢者 120 名に対しアンケート調査を実施

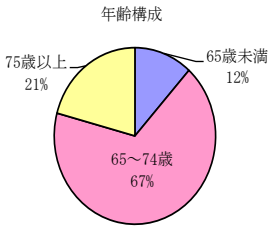
［結果］

①　対象者の性別と年齢構成

（人）

	65 歳未満	65～74 歳	75 歳以上	計
男性	3	39	16	58
女性	11	42	8	62
計	14	81	25	120





② 現在仕事をしているか。

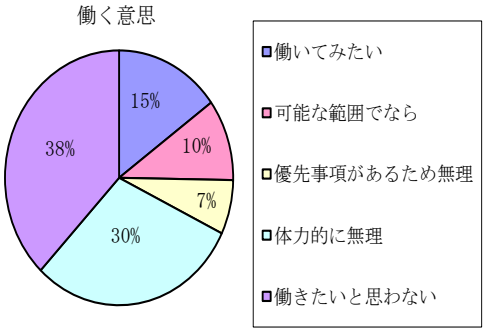
（人）

	65 歳未満	65～74 歳	75 歳以上	計
仕事をしている	6	27	4	37
仕事をしていない	8	54	21	83
計	14	81	25	120

日中の過ごし方（複数回答）
- 孫の守り…6 人
- 介護…6 人
- 趣味…35 人
- ボランティア…6 人
- 通院…11 人
- 農作業…21 人
- 家事…36 人
- 特になし…8 人
- その他…12 人

働く理由（複数回答）
- 健康のため…34 人
- お金のため…18 人
- 生きがいのため…15 人
- その他…4 人

③ 働く機会があったら働きたいか（仕事をしていないと回答した方のうち）

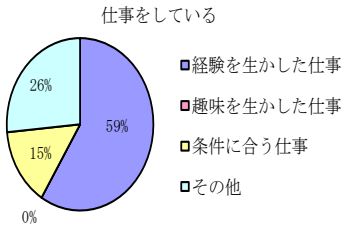


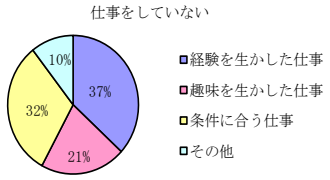
④ 現在携わっている仕事、または携わりたい仕事の種類

（人）

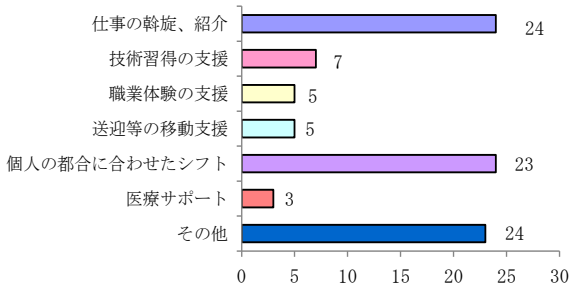
	経験を生かした仕事	趣味を生かした仕事	条件に合う仕事	その他	計
仕事をしている	20	0	5	9	34
仕事をしていない（働く意思有り）	7	4	6	2	19

計	27	4	11	11	53





⑤　仕事をするために必要な支援（複数回答）



第３　各種団体への聞き取り調査

１）伝統農業や伝統産業について

　県内の伝統農業や伝統産業の新たな担い手として、高齢者を受け入れることについての可能性や課題を調査するため、県内の事業者に聞き取りを行った。

・これまで続いてきた取り組みを、伝えたいという思いはあるが技術の伝承や後継者の育成方法が分からない。
・習得に要する期間はものによって異なるが、60 歳以上でも携わることは可能。
・収入はお小遣い程度か、家内工業でほそぼそとやっている程度。

①＜伝統農業その１　奥越さといも＞

［日時］　8 月 24 日（日）14：00～15：30

［場所］　大野市篠座町 1－50　奥越さといも生産者　猪嶋さん宅

［内容］・生産を始めて約 10 年。小規模(7～8 人)でやってきたため、続けてこられた。
・収入は小遣い程度で人を雇うまでの収益はない。自営の直売所は、赤字であり、大規模生産組合にはかなわない。小規模で栽培する程度であれば採算は取れる。農協が買い取ってくれるので、安心して栽培できる。
・新たな設備投資も必要もなく、減反農地を活用して自力で栽培収穫できる。
・伝統野菜は他の品種と栽培方法は同じだが、土地によって品質も変わる。
・栽培を学びながら約 1 年で自力で栽培できるようになるので、農業に関してまったくの素人や 60 代以上の方にも生産は可能。
・伝統野菜の生産を、希望する人には「ぜひ、伝えたい」という気持ちはあるが、独学で栽培してきたので教える術を知らない。
・直売所等に、生産した野菜で作った料理等を提供できるレストランがあったほうがよい。
・伝統野菜に関して県に求める取組みは、肥料や農具を購入するための補助金の拡充をすることである。
・伝統野菜を絶やすのは、もったいない。なんとか後継者を育ててほしい。

②＜伝統農業その２　妙金なす＞

［日時］　8 月 24 日（日）16：00～17：00

［場所］　勝山市妙金島 7－22　妙金なす生産者　中村さん宅

［内容］・生産を始めて約 10 年。亡くなった主人の後を引き継いで 70 歳から栽培を始めた。

・妙金なすは、明治時代から伝統のある品種。妙金島の土質が味にも影響を与えていると考えている。

・他の品種と比べて毎年、作付け場所を変えなくてはならないのが難点。

・収入は小遣い程度。

・主な販路先はジャルダン、やおご商店、サンサンビレッジ、中央市場、蓮華の里、ファーマーズマーケット（直接対面販売）。

・5 年程前までは、なすの加工品（漬物など）も販売していたが、保健所の指導により販売できなくなった（収入の減少）。

・80 歳になっても、生産は可能（自分が現在 77 歳）。妙金島在住で、2、3 年前から自分がアドバイスをしている生産者もいる。

・一人での農作業が一番大変で、体力的に厳しい。

・伝統野菜の生産を継承したい気持ちはあるが、できても苗を分ける程度。種は代々門外不出である。また妙金島で生産しないと、「妙金」という名前は使わせることはできない。

・県から講師の要請があっても、自己流で栽培方法を習得したので、人に教えることはできない。また、希望者に生産技術や栽培方法を伝承することは、自分の年齢を考えると難しい。

・伝統野菜に関する県の取組みに関して、加工場を自分で建築するのは、採算が合わないため、皆が利用できる加工場があるとよい。

③＜伝統産業　越前漆器＞

［日時］　9 月 1 日（日）14：00～16：30

［場所］　鯖江市河和田町 16－2　㈱山田定右衛門漆器店

［内容］・昭和の時代は、頑張った分だけ収入に反映した（歩合制）ので、河和田地区もかなり潤っていた。しかし、平成に入り、特に東日本大震災以降は収入が激減している。家内工業として、なんとかほそぼそとやっているのが現状。漆器は、だんだん必需品でなくなってきている。

・収入は少ないため、使用人を雇って生産する余裕は全くない。

・河和田地区のみんなが継承してほしいと考えているが、収入にならないから自分の子や若者に継いでほしいとは言えない。

・一人前の漆塗りの職人になるまでに、少なくとも 3 年を要する。しかも、その間の収入は全くない。

・越前塗りは、業務用（旅館・温泉など）と日常品用のお椀や箸などを主に取り扱っているため、製品の単価は安いが、輪島塗や山中塗と比べるとまだ受注がある（業務用のネットで販売）。

・越前塗りの生産は分業制であるため、一人での一貫生産は難しい。

・越前塗りに関しては 60 歳以上でも可能。

・60 歳以上の人が職人に弟子入りして頑張っている人はいる。根気が必要。

・越前塗りに関して一番大変なことは、若者が少ないことと、漆器の受注が減少しているため、職人はみんな日中デイサービスへ行ってしまうこと。河和田地区自体に活気がなくなってきたと感じる。

・河和田の職人は、あまり教えたがらないが、来る人拒まずで教えている。

・やる気のある若者を応援する体制が必要。

・漆器の良さ（抗菌作用など）を広く拡げてほしい。子供向けの教育も必要。

・新しい技術とのコラボレーションで、活性化・新しい用途の発見ができないか（⇒管弦楽器の漆塗りなど）。

２）地域における高齢者等の就労の場としての販売施設等について

高齢者も含め地域に住む様々な人々が協力して、地域産品の加工・販売を行うなど、魅力的な地域づくりに取り組んでいる団体について、取組のきっかけや実施状況、課題などについてヒアリングを行った。

・どの施設においても、高齢者が積極的に活き活きと働いている。
・地域を良くしたいという思いから、人が集まる場所を作ろうとして始められた。
・年齢に関わらず携わることができるが、引っ張っていくリーダーや、地域内での支援体制が重要。
・多くの集客があるものの、人件費の支払いなどが十分に賄えるほどではない

①＜ほたるカフェ＞

［日時］ 8 月 30 日（金）9：30～11：30

［場所］ 旧白山小学校第一分校（廃校）

［内容］・廃校舎を改修したカフェを期間限定で営業した。自然豊かな美しい里をイメージさせる “ほたる”という言葉を使い、ほたるカフェと名づけた。国交省主催のツアーコンテストで入賞したことがきっかけ。

・地区には土産物を売っている店も無く、アンテナショップとしての機能や観光の情報発信地としての機能を持たせたかった。

・オープン準備に約 40 万円かかり、1 ヶ月の売上げは 34 万円だった。売上げは当初見込（15 万円）を上回ったものの赤字だった。人件費もほとんど出ない。

・ガス、水道、備品の手配や消防法等の各種許可など、何もないところから自分たちで手探りで進めたため苦労した。

・ランチは、旬の食材や器を地元で調達し、給食室で調理して提供する。

水と食材と器にこだわり、日本の美しい原風景が残る白山地区を堪能してもらおうと思った。

・Facebook やスタッフの口コミ、知り合いのお店にチラシを置いて PR したが、PR 不足も感じている。

・利用者は地区内のリピーターが多い。市内のほか鯖江市などからも多く、若年層も見られた。

※利用者合計：790 名（レジ処理人数）

・来年の６月も実施予定で、もうやめたいというスタッフはいない。今回は開店で手一杯だったが、今後は蛍を中心とした観光にも力を入れたい。
・スタッフに対しては、賃金の支払や適正なシフト体制などが今後の課題。さらに多くの人に手伝ってもらえるような環境づくりをしていきたい。

②＜じんべえ＞

［日時］　10 月 2 日（水）10：00～11：00
［場所］　丹生郡越前町織田　じんべえ
［内容］・2004 年 10 月 9 日開店。築 100 年以上のオーナーの自宅を改装。
・約 30 年間東京で暮らした後、地元で、好きだった料理を活かし、観光地を訪れる人たちが立ち寄れる場所を作ろうと考えた。商工会へ相談したら、親切に対応してくれた。
・自宅は県産業支援センターの融資と持ち出し分併せて 2,000 万円をかけて改装。席数は 31 席。
・AM4：00 から仕込みを始め、AM10：00～PM6：00 まで営業。ランチはバイキング形式で 714 円で食べ放題。惣菜は平日 43 種、土日は 50 種を提供。
・スタッフはシルバー人材センターを通して雇用。働きたい人は潜在的にいた。現在、9 名のスタッフ（70 代 3 名、60 代 5 名、50 代 1 名）のうち 6 名が調理師免許取得（受験費用援助）。皆ここに来てから免許を取得した。60 代からでも十分始められる仕事である。時給は 700 円程度。
・お店で使う器は地元の越前焼を使用。食材は所有する畑や田んぼで調達。
米、野菜等の栽培はシルバー人材センターにお願いしている。
・年商の半分が材料費で、人件費、維持管理費を差し引くと利益はわずか。
・共働きの多い福井でお惣菜は重宝されると考え、最初は 30～40 代の働く女性をターゲットにしていたが、オープンしてみると高齢者や男性のお客さんが多かった。
・ホームページは自分で更新している。

③＜かじかの里山殿下＞

［日時］ 10 月 5 日（土） 13：30～14：30

［場所］ 福井市畠中町　かじかの里山殿下

［内容］・「お年寄りが集う所」を作りたいという思いがあった。

・女性たちに、少しでも経済力を持たせてあげたいという思いから、何か商売ができないかと考えた。

・集落以外の人が殿下地区に山菜を取り来ている様子をみて、自分たちの集落にある山菜を、自分たちで調理をし、たくさんの人に食べてもらおうと考えて、試しにそば＆山菜定食をやり始めたのが食堂のはじまり。

・平成 25 年 1 月にオープン。月に 1 週間営業したところ売上げが驚くほどあったので、4 月より AM11:00～PM2:00 まで毎日営業（定休月曜）することにした

・バイキング形式で約 30 種類の惣菜を提供。値段は味噌汁がついて 800 円。

・食材は主に地元で調達している。売上げに占める「人件費、材料費」の割合が高い。

・建物は地区の高齢者活性化センターを活用。平成 3 年に、福井市の「うらがまちづくり事業」の 300 万と寄付金を利用して、JA の養蚕場として利用されていた建物を改築した。

・三重県に、旬の地元野菜を使ってバイキング方式で料理を提供する「せいわの里 まめや」というお店があり、福井市の「夢・創造事業」を活用し見学した。

・できるだけ自立していたいと思うと張り合いも出てくるし、エネルギーにもなる。元気に過ごしていると、行動にも欲がでてくる。

・「地域を支える」というある種の使命感を持つことが、事業を継続させていくうえで重要。

・現在では、全国から多くの方・団体が、かじかの里山の立ち上げから現在に至るまでの経緯などの取組みの視察に来ている。

３）高齢者の人的なつながりを支援する取組について

高齢者同士のつながりづくりを通じて、生きがいを持って暮らしていけるような取組について、利用者からの声や実施上の課題などについてヒアリングを行った。
・恋愛は生きがいづくり、健康づくりの一番の近道である。高齢者からの要望もあり、出会いづくりの取組みは必要と考えている。
・社会的には容認のハードルが高く、広報等も協力を得にくい。行政の後押しも重要。

［日時］ 9 月 3 日（火）18：30～20：30
［場所］ 福井市灯明寺町　黄昏倶楽部
［内容］・高齢者の出会いを支援するために立ち上げた仕組みで、有料会員制で会員同士は匿名で文通を行う。
・仕事、趣味、ボランティアでは生きがいを感じることができない高齢者も多く、他の支援策（就労支援、生活支援、介護支援など）よりも、異性間交流が高齢者の元気につながり、社会福祉の一助になると考える。
（実際に 50 代男性からも「3.11 以後、一人で老後や日常生活を送ることに不安を覚えた。パートナーがほしい」という意見があった。）
・利用者からの声
- 趣味が合う友達がほしい。年齢を気にせず、友達がほしい。
- 定年退職後、社会との接点がなく、自分の拠り所がない。
- 妻と死別して、もう一度パートナーを探したい。
- 気兼ねなく、異性に声を掛けられる場所がない。
- 相手の家庭事情などを気にするあまり、知り合いになれる機会を逃してしまう。
- 老人クラブ等は、いかにもお年寄りの集まりで入りたくない。
- 個人でパートナーを見つけたい。（多人数での交流会等の参加は嫌。）

・このような取組みを理解し、認める文化や社会の醸成が必要。
例えば、広告媒体を探すときにも、社会に許容されていないため苦労する。
行政の後押しが必要と感じる。

第３章　政策提言

第１　政策の基本的な考え方

高齢者が活き活きとした生活を送るためには、高齢者自身に活きがいを持ってもらうことが不可欠である。

高齢者に活きがいを実感してもらうために、以下の 3 つの基本的な考え方が前提になる。

①手と身体を使い、ものをつくって、身体的に健康になる。

②少しでも収益をあげ、生きている間の金銭的な不安を取り除く。

③人、特に異性とのつながりを持ち、身の置き所、拠り所がないなどの不安を取り除くとともに、活動の範囲を広げてもらい社会的な孤立を防ぐ。

第２　政策の効果と目標値

高齢化というのは、現状分析で見てきたとおり、必然的なものである。生産力は低下する一方社会負担額は激増することとなる。

このような環境下にあって、高齢者が活躍し、健康で活きがいを持つことを目的に仕組みを立案する必要がある。

我々は健康寿命の向上を目的に、活きがいを実現する目標を以下の通り設定する。

（１）つくる　　～元気生活率全国１位を目指す～

手と身体を使うことで健康増進が図られ元気生活率 96.6%を全国 1 位に

（２）かせぐ　　～65 歳以上の有業数を増やす～

地域産地域消を目的に、高齢者が収益を上げ、65 歳以上の有業者数を 200 人増加

（３）つながる　　～社会的孤立の軽減～

人と人とがつながることで、社会的に孤立した高齢者の割合を 1 割減らす

⇒　**【最終目標】　　3 年後の健康寿命日本一を目指す。**

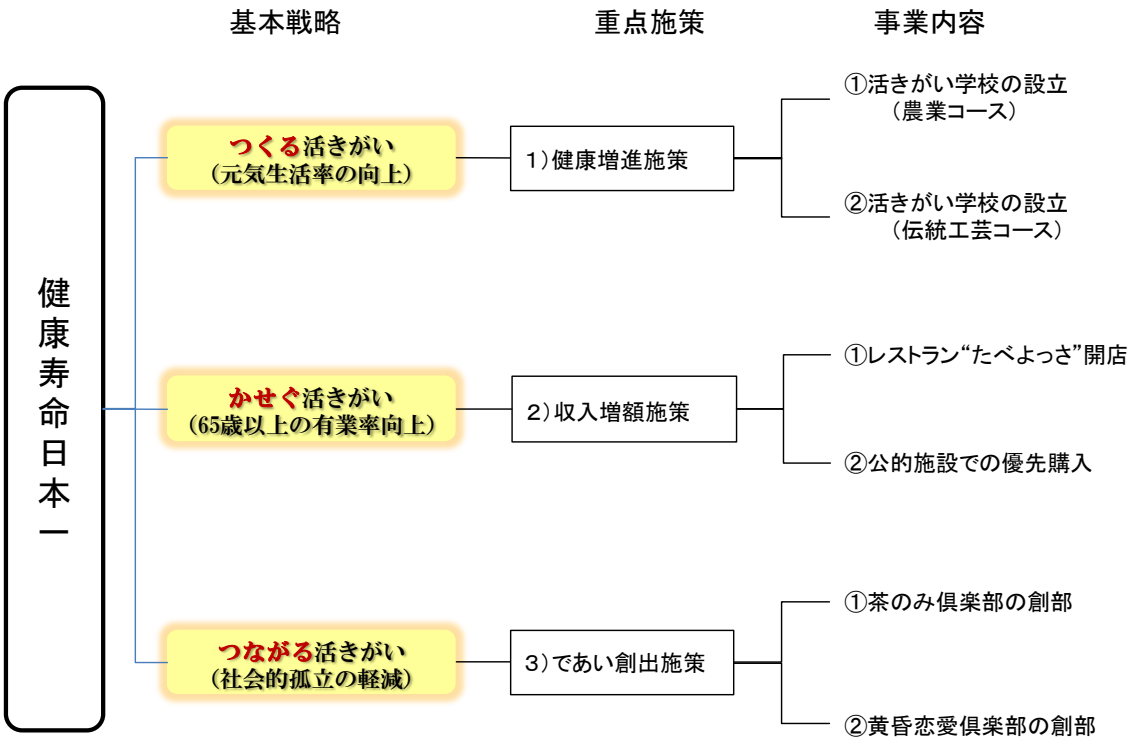
（健康寿命男性 79 歳を 80 歳、女性 83 歳を 85 歳に）

また、これらの目標を達成する具体的な手段として、「つくる・かせぐ・つながる」ための機会の提供として、マルシェ“あつま・ロッサ”を開設する。

マルシェ“あつま・ロッサ”の主な役割は、以下の 3 点である。

①活きがい学校	⇒農業や伝統工芸の生産を通して、健康な身体づくりを目指す。【健康増進施策】
②飲食店・食品加工場	⇒運営に必要なスタッフ等に高齢者を活用し、高齢者の新しい収入源のひとつとする。【収入増額施策】
③であいのサポート	⇒高齢世代に特化した交流の機会を促進させる。【であい創出施策】

【施策体系図】



第３　重点施策

１）　健康増進施策　「手を使い、身体を使って老化防止」
～地域資産を活用したものづくり戦略～

（１）現状

・農業就業人口は毎年減少している
・耕作放棄面積は、専業農家以外で増加傾向となっており、主要因は労働力不足と価格低迷による経営条件悪化となっている
・伝統野菜や伝統工芸品の生産者は、継承して欲しいと考えており、高齢者でも十分可能と感じている

（２）目的

・高齢者に手や身体を大いに動かしてもらい、健康な身体となることで介護率および入院率を下げることで今後増加が見込まれる介護難民を抑制する
・高齢者が担い手の一部となり、公共機関なども含め域内需要を創出しながら、持続性のある産業づくりを図る
・高齢者の持つ感覚を活かした伝統産業、伝統野菜づくりを図る

（３）内容

ア　活きがい学校の設立【農業コース】

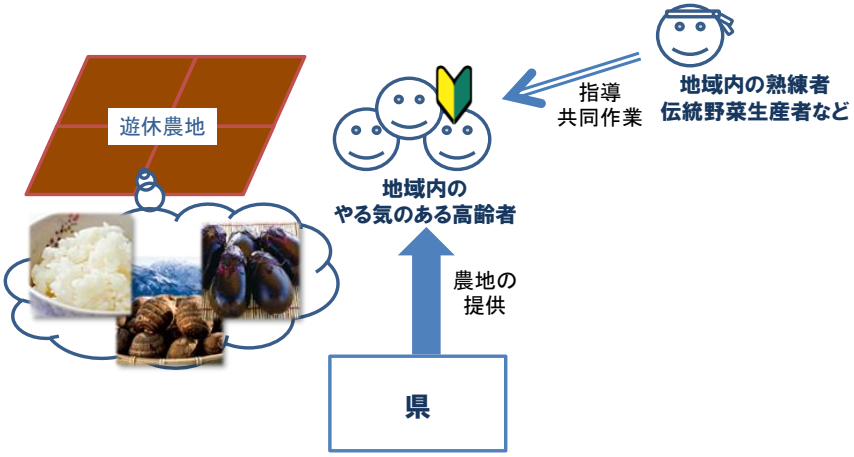
・公民館などを利用して、農業を一から学びたい人に対してノウハウを教える学校を設立
・県が耕作放棄地を借り入れ、実践的な農業を教える
・初年度は耕作を放棄した農家の手を借り、土づくり～種まき～収穫　まで
・伝統野菜コースとして、地域に密着した伝統野菜を継承する

イ　活きがい学校設立【伝統工芸コース】

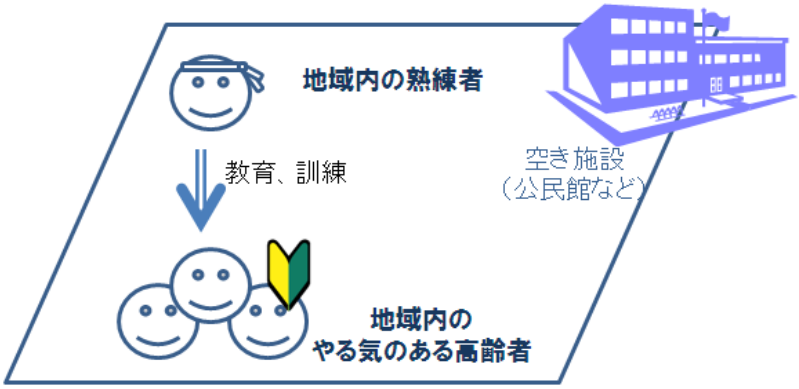
・公民館などを利用して、伝統工芸を少しでも学びたい人に対してワークショップを開催
・汎用性のある漆器や越前焼を製作する

（４）事業イメージ

①活きがい学校［農業コース］



②活きがい学校［伝統工芸コース］



（５）成果目標と効果目標

［成果目標］	農業コース	（初年度）	１００人
		（２年目）	２００人
		（３年目）	３００人
	伝統工芸コース	（初年度）	３０人
		（２年目）	５０人
		（３年目）	８０人

［効果目標］　元気生活率　96.6%（全国２位）を全国１位に

２）　収入増額施策　「レストラン“**たべよっさ**”開店！」
～高齢者による高齢者のための地域内消費戦略～

（１）現状

・高齢者の平均年間取得は全世帯平均の約半分
・6 割以上の高齢者がほぼ公的年金のみで生活している
・平成 25 年度には、年金の支給開始が 65 歳以上となり、平成 30 年度まで、保険料率も引き上げられる
・可処分所得は近年減少しており、貯蓄の取り崩しによって消費支出に対する不足分を埋めている

（２）目的

・高齢者の収益を増やし、今後見込まれる地域の消費額減少に対して、地域内消費額の増加を目指す

（３）内容

ア　レストラン“**たべよっさ**”開店

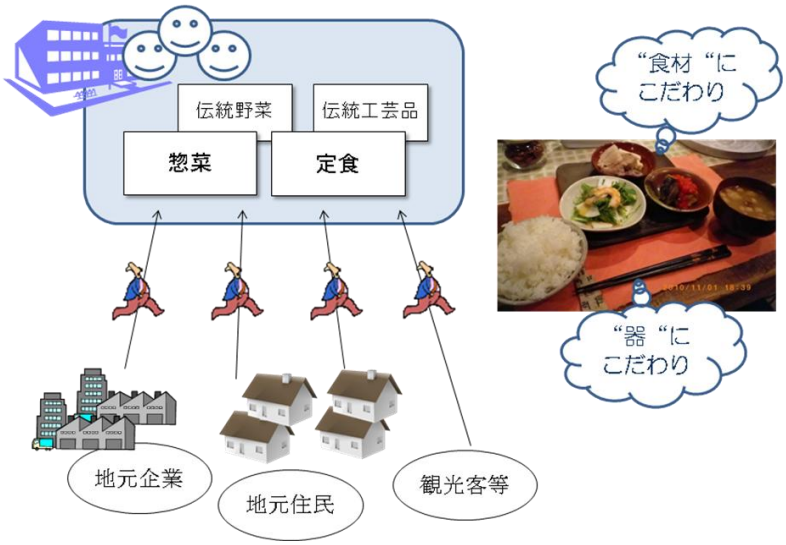
・地域内の産物を主に取り扱い、高齢者がメインスタッフとなったレストランを作る
・店舗は廃校になった小学校や商店街の中の空き店舗を利用するなど、地域の中にあり、地域の高齢者が歩いてでも気軽に来られる場所とする
・メニューとして、地域内で収穫できるソバ、米、里イモ、お茶等
・器にもこだわり、越前焼や漆器のお盆等
・レストラン内で加工品を新たに開発し、供給販売を行なう（妙金なすの黄金漬や奥越里いもコロッケ等）

イ　公的施設での優先購入

・学校給食や公的施設（県庁食堂等）へ地場産農産物や工芸品（漆器、焼物）を優先的に供給
・県は市町と連携し、焼物や漆器を利用したい幼稚園や保育所に供給し、子どもの時から、漆器や越前焼を利用する機会を与える

（４）事業イメージ

①レストラン“たべよっさ”の開店



②公的施設での優先購入

（５）成果目標と効果目標

［成果目標］　レストラン“たべよっさ”　　3 年後までに 3 店舗開設

［効果目標］　65 歳以上の有業者数を 200 人増加させる

３）　であい創出施策　「つながりで不安解消、活動ＵＰ」
～人と人とのつながりを誘導させる戦略～

（１）現状

・友人・知人と食事や雑談している時や、夫婦団らんのときに活きがいを多く感じる高齢者が多い
・東日本大震災後、特に老後や日常生活を送る上で不安を覚える高齢者が多い
・高齢者は自由な時間が多い
・自動車運転免許を持たない高齢者は、外に出て活動する頻度が低い
・高齢者の外出率は日高齢者の約半分
・定年後、コミュニティー等に入りづらいと感じている高齢者が多い
・単独世帯では、家族と過ごす時間が全くない割合が８４％
・近所づきあいがなく、心配事を相談できる相手もいない割合も高い
・郊外化が進み、駅前商店街のにぎわいの喪失

（２）目的

・高齢者が増加すると主に、単独世帯数も増加しており、不安を抱えたまま生活を過ごすのではなく、人と人とのつながりを広くし、交流を促進させる
・どんな高齢者支援（就業支援、生活支援、介護支援等）よりも、生きる喜びを与え高齢者が活き活きになれる、異性間交流を推進させる
・仕事、ボランティア活動、趣味では、活きがいを感じることができない高齢者の受け皿づくりとする
・高齢者同士の出会いの機会を作り、社会的孤立を軽減する

（３）内容

ア　茶のみ倶楽部の創部

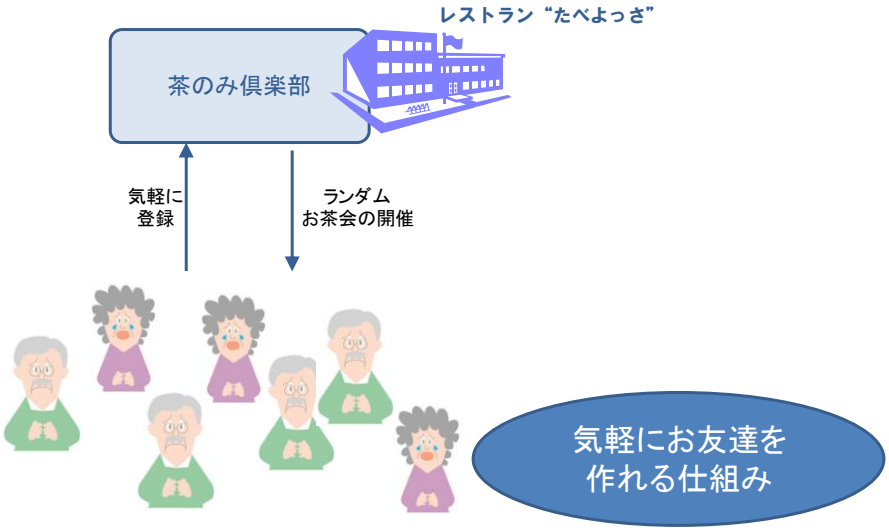
・レストランに来た初期時客や買い物客に、茶のみ友達会員に登録してもらう
・月に１回程度お食事会を開催し、趣味などで気の合う会員同士がつながりを持てるよう、交流の場を提供する

イ　黄昏恋愛倶楽部の創部

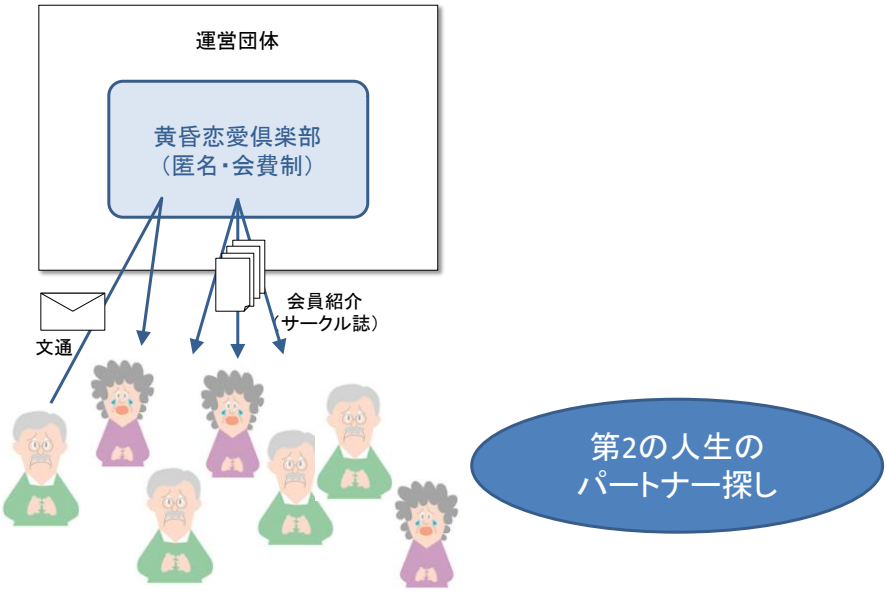
・離別、死別して単独世帯になった高齢者等を対象に、第２の人生のパートナー探しの場を提供
・会員制とし、年会費を徴収することで、貴重性を向上させる
・匿名性、個人性を尊重し、事務局を通じてのみ連絡できる体制
・会員には会報誌を月に１回発行し、ペンネーム、居住地、年齢、趣味、一言だけ掲載して、連絡を取りたい人に手紙を書き、事務局を通じて相手に発送

（４）事業のイメージ

①茶のみ倶楽部の創部



②黄昏恋愛倶楽部の創部



（５）成果目標と効果目標

［成果目標］　異性マッチング数　3 年後までに 50 組

［効果目標］　社会的に孤立した高齢者の割合を 1 割減らす

おわりに

私たち「チーム　（シニア）ワセ」は、これからの超高齢社会で、高齢者が活き活きとなる社会、イケイケになる社会を実現できるような施策を検討してきました。

これまでの生活の中で、「高齢社会が進行しています！」と声高に叫ばれていてもなかなか実感が湧かず、他人事として感じていましたが、今回のこの研修を通じて、私たちが高齢者になる頃には高齢社会が今よりも、さらにハードモードになっていると現実的に感じるようになりました。

私たちが提言した施策が今後の高齢社会に向けて、一助にでもなれば幸いです。

最後に、今回の研修の講師である田中浩先生、アンケート調査に御協力いただきました皆様、聞き取り調査に快く御協力いただきました皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

今後はこの研修で得た人脈・経験を、今後の業務に十分に活かしていきたいと思います。

【Ｄ班　活動の経緯】

活　動　日	場　　所	内　　容
H25. 6.18(火)	県立病院	第１回会合
H25. 6.25(火)	県立病院	第２回会合
H25. 7. 9（火）	県立病院	第３回会合
H25. 7.18（木）	県立病院	第４回会合
H25. 7.24（水）	県立病院	第５回会合
H25. 8. 1（木）	県立病院	第６回会合
H25. 8. 5（月）	県立病院	第７回会合
H25. 8.13（火）	県立病院	第８回会合
H25. 8.20（火） 8.21（水）	健康の森	アンケート調査①
H25. 8.21（水）	県立病院	第９回会合
H25. 8.23（火） 8.25（水）	坂井市公民館	アンケート調査②
H25. 8.24（土）	大野・勝山	農業生産者聞取り
H25. 8.28（水）	県立病院	第１０回会合
H25. 8.30（金）	白山公民館	ほたるカフェ聞き取り
H25. 9. 1（日）	山田定右衛門 漆器店	伝統工芸生産者 聞取り
H25. 9. 3（火）	黄昏倶楽部	黄昏倶楽部聞き取り
H25. 9. 9（月）	県立病院	第１１回会合
H25. 9.11（水）	県立病院	第１２回会合
H25. 9.18（月）	県立病院	第１３回会合
H25. 9.25（水）	県立病院	第１４回会合
H25. 9.30（月）	自治研修所	第１５回会合
H25.10. 2（水）	じんべえ	高齢者が経営する 地域食堂の聞き取り
H25.10. 5（土）	かじかの里山 殿下	高齢者が経営する 地域食堂の聞き取り
H25.10. 9（水）	県立病院	第１６回会合
H25.10.17（木）	県立病院	第１７回会合
H25.10.22（火）	県立病院	第１８回会合

チーム　(シニア)ワセ

安全環境部	循環社会推進課	藤崎 晶代
健康福祉部	県立病院	山﨑 千尋
観光営業部	ふるさと営業課	野川 洋平
土木部	丹南土木事務所	平井 勝治
福井市	環境課	中津 浩平